

明治初期におけるアメリカ書字教育理論の受容

—C. ノルゼントを中心として—

杉山 勇人（初等教育学科）

Acceptance of American Handwriting Education Theories in the Early Meiji Era: Focusing on C. Northend's theory

Hayato Sugiyama

Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

Abstract

In the early Meiji period, Japan accepted Western handwriting education theories centered on the United States. In this research, among other theories, we studied the handwriting education theory by C. Northend from his works such as *"The Teacher and Parent"* and *"The Teacher's Assistant,"* and how this theory was accepted in Japan. As a result, commonalities with the theory of handwriting education in the Edo period, such as attitudes emphasizing handwriting education, were observed. Conversely, it is assumed that there had also been teaching methods first encountered through Western theories, such as emphasis on fast writing and analytical criticism towards letters.

Key words: handwriting education, shuji, penmanship, C. Northend

キーワード：書字教育、習字、ペンマンシップ、C. ノルゼント

研究の目的と意義

近世以前の庶民教育機関であった寺子屋において、学習の中心は「手習い」と呼ばれる文字学習であった。手習いの中心は毛筆で文字を書くことであるが、それは同時に文字の読み方や、その意味内容を学習することであり、さらにその過程において道徳修養や社会規範も学んでいく総合的な学習形態であった。

ところが、明治維新によって公教育制度が導入されると、教科による教育が実施されるようになる。明治5（1872）年8月に公布された学制において、入学学年である下等小学第八級では、「綴

字、習字、単語、会話、読本、修身、書牘、文法、算術、養生法、地学大意、理学大意、体術、唱歌」の14教科が設置された。現在の国語教育に関わる教科だけでも、「綴字、習字、単語、会話、読本、書牘、文法」と多くの教科に分化している。このなかで習字は教科の一つとなり、その内容は「字形ヲ主トス」と簡単に示された。つまり、習字科は文字を書くことの技能の教育（ここでは「書字教育」とする。）として独立し、文字の読み方や意味内容の指導は他教科に移行することになったのである。

学制の教科の枠組みは、西洋の教育制度に倣っ

て設定されており、教育の内容と方法も西洋教育理論の影響が色濃く表れている。しかし、習字科については、毛筆を用いるという筆記具の違い、あるいは西洋との文字体系の違いから、西洋教育理論の影響をあまり受けておらず、「習字教育の内容と方法は、外見的に寺子屋と比べても、それほど異同が見られない」⁽¹⁾とされている。

しかし、文化の差はあるが西洋の小学校でも書字教育は課されており、その教育方法は理論的にまとめられていた。そもそも字形のみを指導するという教科の枠組み自体が西洋の教育制度である。習字科についても他教科と同じく、西洋教育理論との比較検討を試みておくべきであろう。

これまで書写書道教育史では、「書は東洋の伝統である」という言説を重視するあまり、西洋の書字教育理論を等閑視してきたところがある。しかしながら、書字教育にとって西洋文化との出会いは、近世と近代を隔てる大きな変化であった。それは硬筆筆記具の登場や、芸術の概念の導入などによって、近代以降の書字文化に大きく影響を与えたのである。

本研究はこれらを踏まえ、当時の西洋教育理論として最も広く普及したアメリカ教育理論における書字教育の内容と方法について探っていききたい。なかでも、C. ノルゼントの書字教育理論は、当時を代表する理論であった。これらを原書及び翻訳書の内容から検討することで、明治初期における習字教育の基礎研究としたい。

1. 明治初期の西洋教育理論にみられる書字教育理論

1-1. 明治初期における西洋教育理論の受容

すでに幕末期には、西洋学問の吸収が盛んであったが、明治維新以降はさらに加速することになった。特に小学校教育・師範教育は、制度、設備、教育の内容と方法など、ほぼすべて西洋を模範とした。明治5年の学制は、制度の面ではフランスから、教育の内容と方法はアメリカに倣うところが大きいといわれている⁽²⁾。

学制の実施は、小学校と師範学校の創設から始まる。その教育の内容と方法の模範となったのは、

アメリカから招きたいわゆる御雇外国人教師たちであった。明治4(1871)年9月に来日したスコット(Marion Maccarrell Scott, 1843-1922)は、翌5年から東京師範学校で小学校における指導法を伝授した。アメリカの小学校をほとんど模したとされるスコットの指導法は全国モデルとなり、最新の指導法として広く普及することになった。スコットが示したのは、一斉教授、実物教授、問答法といった当時のアメリカで一般的であったベスタロッチ主義の教授法であった。

また、安政5(1859)年に来日し、明治政府の文教政策の顧問となったアメリカ人宣教師フルベッキ(Guido Fridolin Verbeck, 1830-1898)や、明治6(1873)年に来日し、翌年には文部省学監として教育行政を担ったモルレー(David Murray, 1830-1905)のように、明治政府の教育行政には、アメリカ人指導者が任命されていた。彼らによって、明治初期の教育の内容と方法にはアメリカの影響が強く表れたのである。

こうした御雇外国人の指導とともに、西洋教育理論に関わる書籍の輸入も盛んに行われた。文部省はその創設以来、欧米の教育書の翻訳、紹介を進めており、その約半数はアメリカのものであった。また、それらの書籍は同時代のアメリカで広く普及していたものが選ばれ、翻訳されていたのである⁽³⁾。

これらの西洋教育情報が日本でどのように受容されたかについては橋本美保の研究⁽⁴⁾に詳しい。学制の頒布に先立って、明治5年5月に東京に師範学校が設置され、その後、明治6年8月に大阪と宮城、同年12月に愛知、広島、長崎、新潟、そして、東京に女子師範学校が設置される。橋本によれば、これらの師範学校では教科書として翻訳された教育書が用いられたが、各学校では原書も購入されていた。後述するページやノルゼントの著書については、原書のままか、各学校で翻訳したものが用いられた。そのため、西洋教育理論の受容を考える際には翻訳書のみではなく、原書からの直接的な影響も考察する必要がある。

1-2. アメリカ教育理論における書字教育理論

学制前後に輸入されたアメリカ教育理論のなかから、書字教育に関わる部分について検討していきたい。西洋の書籍としては、まず西洋のペンマンシップ (Penmanship) に関わる書籍の輸入があった。先述したフルベッキは、明治5年3月に小・中学校で用いるべき、教科書・絵図・地図などの教材を選定し、文部卿に具申している。 (「教科書具申」⁽⁵⁾) ここでフルベッキはペンマンシップに関わる教材として、「スペンセリアン加字絵図」、「スペンセリアン習字本」を挙げている。ここに挙がる「スペンセリアン加字絵図」は、“Spencerian letter chart”⁽⁶⁾ とされる。また「スペンセリアン習字本」は、19世紀のアメリカにおける筆記体書法の代表であるスペンセリアン法 (Spencerian Penmanship) の書籍と考えられる。具体的には、“Spencerian Key to Practical Penmanship”⁽⁷⁾ あるいは、その解説書である “Theory of Spencerian Penmanship for School and Private Learners”⁽⁸⁾ とされる⁽⁹⁾。こうした英習字本は翻訳されたのではなく、英語学習のための習字本として紹介されたと考えられるが、明治20年代の習字教科書にはスペンセリアン法の影響とみられる構成内容を見ることができる⁽¹⁰⁾。

続いて、明治初期に翻訳された書籍から、書字教育についての記述をみていきたい。

箕作麟祥訳『学校通論』(文部省、明治7(1874)年)は、アメリカ・フィラデルフィア師範学校校長であったウィッカーシャム (James Pyle Wickersham, 1825-1893) の著書 “School Economy”⁽¹¹⁾ の翻訳である。“School Economy”は教育内容、学校管理について網羅的に記した教師の手引書である。訳者である箕作麟祥は、学制の起草に際し「学制取調掛」として統括的立場から携わっていた。“School Economy”が学制へ与えた影響は大きいと思われる。

『学校通論』は、教育の内容について簡単な概要しか記していない。下等小学校の書字教育については「下等小学ニ於テハ図引及習字ノ二科ヲ教ユルニ特ニ其意ヲ留ム可キ者トス」⁽¹²⁾ とある。また、中等小学校では「図引及ヒ習字ノ二科ハ等級ノ如何ナルヲ問ハス常ニ継続シテ之ヲ学ハシム可

シ」⁽¹³⁾ とある。ここでは、図引 (drawing, 「図画」のこと。) と習字 (writing) に時間を費やすこと、各学年に必ず習字を配当すべきことが示されている。図画と習字を教育内容として重視するのは、ペスタロッチ主義の教育実践であった⁽¹⁴⁾。

また、もう一つ当時広く読まれた翻訳書として、『彼日氏教授論』(ファン・カステール訳、文部省、明治9(1876)年)がある。こちらはD. ページ (David Perkins Page, 1810-1848) の “Theory and Practice of Teaching”⁽¹⁵⁾ の翻訳である。ページは、1844年にオーバニー師範学校の校長となり、その教師論はアメリカ教育界に強い影響を与えた。日本でもこの翻訳は教育理論の教科書として最も読まれたものであった。ただしこの書は教師論が主であり、教科の内容についてはあまり記されていない。書字教育については、“Literary Qualifications of the Teacher” (教師に必要な学芸) という章において、“Orthography” (正書法)、“Reading” (読書) に続いて “Writing” を挙げ、次のように短く記している。

3. Writing. It is not respectable for the teacher of the young to be a bad writer; nor can it ever become so, even should the majority of bad writers continue to increase. The teacher should take great pains to write a plain, legible hand. This is an essential qualification.⁽¹⁶⁾

『彼日氏教授論』では “Writing” を「書法」と訳している。ここでは書くことの指導において、わかりやすく書くこと (write a plain) と、読みやすく書くこと (legible hand) が重要であり、それが教師の必須条件であると述べている。

このように、明治初期に翻訳されたアメリカの書字教育理論では、書字教育の重要性とそのための教師の技能の必要性を主張している。ごく当然のことを述べているだけにも思えるが、日本と同じく西洋の教育理論でも書字教育を重視していたことが確認できる。

さて、ここまでの西洋教育理論は、書字教育について簡単に触れているものであった。その質と

量において、当時のアメリカ書字教育理論を代表するのは次に挙げるノルゼントの理論である。

2. C. ノルゼントの書字教育理論

2-1. C. ノルゼントの教育理論

C. ノルゼント (Charles Northend, 1814-1895) は、マサチューセッツ州ニューベリーに生まれた。アメリカ東部ニューイングランド地方で初等・中等教育の実践経験を積み、後年はコネチカット州、マサチューセッツ州などで師範学校長や教育長を歴任した。1963年には、アメリカ教育会 (The American Institute of Instruction) の会長に選出されている⁽¹⁷⁾。

ここに取り上げる “The Teacher and the Parent”⁽¹⁸⁾ (以下、“T&P”) と、“Teacher’s Assistant”⁽¹⁹⁾ (以下、“TA”) はノルゼントの代表的著書である。これらはページの “Theory and Practice of Teaching” と並んで、当時のアメリカで広く読まれていた。

“T&P” は、教師論を中心に各教科の授業法にも触れている。問答を重んじ、児童の自発的活動を促すところは、アメリカにおける初期のペスタロッチ主義の影響がみられる。この書は『那然小学教育論』(小泉信吉・四屋純三郎訳、文部省、明治10 (1877) 年) として翻訳された。小泉信吉・四屋純三郎もともに福沢諭吉の門下生であり、英語力に優れていた。なお、本書が刊行された明治10年の時点で小泉はロンドンに留学しており、彼が留学に出発した明治7年10月には少なくとも翻訳が完了していたと考えられている⁽²⁰⁾。原題は直訳すれば、「教師と親」であるが、翻訳では「那然 (ノルゼント)」の「小学教育論」となっている。

“TA” は、新たに教職へ就こうとする人への入門書であり、教師論・学校管理論・教授法を述べている。この書は、『教師必読』(ファン・カステール訳、文部省、明治9 (1876) 年) として翻訳された。訳者は、オランダ人ファン・カステール (Abraham Thierry Van Casteel, 1843-1878) である。カステールは明治初期に来日した御雇外国人で、『彼日氏教授論』も彼の訳である。ただし彼

は教育学が専門ではなく⁽²¹⁾、しかもその翻訳は大変わかりにくい日本語で、意味不明な箇所も多い。

なお、刊行年は “T&P” が先で “TA” が後であるが、翻訳は『教師必読』が先で『那然小学教育論』が後に刊行されている。これらノルゼントの二著は師範学校の教科書として用いられるが、先に述べたように翻訳書だけでなく原書も各学校で読まれていた。その翻訳上の問題からも、むしろ原書の方が読みやすかったのではないかと考えられる。これらを踏まえ、ノルゼントの書字教育理論について、翻訳書を参考にしつつ原書を中心にみていきたい。

2-2. “The Teacher and Parent” (『那然小学教育論』) における書字教育理論

“T&P” は、教科ごとに教授法を論じており、書字教育としては Penmanship の節を設けている。この節は『那然小学教育論』では、「習字ヲ論ス」と訳されている。冒頭の一文を挙げてみよう。

The acquisition of a neat, legible, and rapid style of writing, is highly desirable, as a mere accomplishment, but much more so as a useful attainment.⁽²²⁾

これは書字能力の定義といえる。書くこと的能力として、neat (整齊)、legible (読みやすさ)、rapid (速さ) の獲得が望ましく、これらは useful attainment (実用の能力) として必要であると述べている。『那然小学教育論』では、「夫レ書体明媚ニシテ運筆迅速ナルノ願フベキハ、観美ノ為メニスルニ非ス、是レ大ニ実用ニ関スル所アレハナリ」と訳されている。原書では、Penmanship は “a mere accomplishment” (単なる技芸・教養) ではないとするが、翻訳では「観美ノ為」ではないとされている。日本の実情に合わせて、文字の「美しさ」を重視すべきではないことを強調した訳となっている。なお “TA” にも、“Good writing is characterized by legibility, rapidity, and beauty.”⁽²³⁾ とあり、「読みやすさ」、「速さ」、「整齊さ・美しさ」は、書字教育の要点であった。こ

れに関して“T&P”では、次のように説明している。

It is very desirable that scholars should form the ability to write with rapidity; but they should, in the first place, be taught to write well.⁽²⁴⁾

生徒は、速やかに書く能力を持つことが望ましいが、はじめの段階ではまず正しく書くことを教えるべきであるという。上手に書けることが前提で、その上で速やかに書く能力(the ability to write with rapidity)を身に付けたいのである。なお、学制では、下等小学第八級～第一級は「習字」であるが、上等小学第八級～第七級は「細字習字」、第六級～第一級は「細字速写」という教科名である。上級になると「速さ」が意識されることは、この考え方を踏まえているといえる。

現在の小・中学校国語科の書写に関する指導事項においても、学年が上がるとともに書く「速さ」が加えられており、「速さ」は書写技能の一つとして認識されている。しかし、近世の手習い教育においては、「速さ」が意識されることはほとんどなかったのではないだろうか⁽²⁵⁾。「速さ」が技能として意識されるようになるのは、こうした西洋教育理論の影響と考えられるであろう。

では、教師はこれらの技能を学習者に身に付けさせるためにどうすればよいのか。“T&P”では次のように示している。

If the teacher would have his pupils improve in penmanship, he must himself feel, and cause them to feel, that the exercise is a useful and important one. In addition to this, if he can furnish evidence, in well-written copies, of his own ability and skill in writing, his efforts to teach will prove much more successful;⁽²⁶⁾

生徒の書字能力を高めるためには、教師自身が練習の重要性を意識し、生徒にもそれを意識させなければならない。また、先述のページの論と同じように、そのためにまず教師自身が書字の能力

と技術(his own ability and skill in writing)を身に付けなければならないと述べている。そして、そのための要点として、次の五つを提示している。

1. The pupils should be made to discern the difference between good and poor writing.
2. A particular time should be appropriated to this exercise, daily; and, during this time, it should receive the earnest and undivided attention of both teacher and pupils.
3. At the close of the writing exercise, let the books be collected and placed upon the teacher's desk, and let him devote a few minutes to their examination, expressing his approval or censure, as circumstances may seem to require.
4. It is often the case that pupils become weary of writing the same copy for so many successive lines, and it may be owing to this, in part, at least, that the bottom lines on a page are often more imperfectly written than any upon the page.
5. At or near the beginning of a term, let each pupil be required to write a few lines upon a page of a blank book provided for the purpose, and, at the end of the term, write as many more, directly beneath those previously written.⁽²⁷⁾

原書ではこのそれぞれの項目に解説が加えられている。それらの解説も含めて、要点をまとめると次のようになる。

- ①生徒は筆跡の良否を判断する能力を身に付けなければならない。
- ②ペンマンシップの練習は、毎日、時間を設定し、その時間は教師・生徒ともに熱心に注意して取り組まなければならない。
- ③練習が終わったら、教師は生徒の課題を集め、必要に応じて生徒一人ひとりに対して批評を加える。この場合、個別に呼び出すか、あるいは黒板を使用して指導する。
- ④生徒は、同じ文章を繰り返し書くとなれてしまい、ページの最後の方は不完全に終わってしまう。

う。一度に書くのはページの半分ほどでよく、時間の間隔をあけて練習を再開した方がよい。

- ⑤各期の始まりには、数行の清書を書き、その期の終りにはその下に書き込む。これによって生徒は改善を確かめることができるので、意欲的に取り組むことができる。

要点①として、筆跡の良否を判断する能力を身に付けることが挙げられていることは注目される。手習い教育では、何はともあれまず書くことから学習が始まっていたが、ここでは初めに判断力が重視される。これについては、次節で詳しく述べたい。②は、“School Economy”とも共通する、書字教育の教科としての重視である。ただし④にあるように、長時間の練習は求めている。この時間は「1時間の4分の3」でよいとしている。③、④、⑤は実践的な指導法であり、生徒を飽きさせない、また自ら考えて意欲的に取り組ませるという指導の工夫をみることができる。

また、“T&P”では、教材の内容について次のように述べている。

The teacher should studiously endeavor to furnish well-written copies, and such as contain good moral sentiments, or express some important fact, or historical event. By judicious attention to this, many good impressions may be made upon the mind, and many useful facts fixed in the memory, while the pupil is more directly engaged in learning to write.⁽²⁸⁾

習字手本はその内容が、道徳的であるもの、あるいは重要な事実、歴史的な出来事を含むものを選ぶべきであるという。これらの教材によって、生徒に道徳的な作用が生まれ、また、その内容を知識として得ることができる。そのため習字に熱心に取り組むという。これは習字教材が同時に学習教材となる手習い教育とも共通した考え方である。しかし、明治初期の読書教材と習字教材は別系統となっており、この考え方は反映されていない。読書と習字の関連を重視するようになったのは、明治33（1900）年の小学校国語科の成立によって、読書・作文・習字の三科が統合されてからである。

たのは、明治33（1900）年の小学校国語科の成立によって、読書・作文・習字の三科が統合されてからである。

2-3. “Teacher’s Assistant”（『教師必読』）にみられる書字教育理論

ノルゼントのもう一つの主著である“TA”は、新人教師に送る22通の手紙という形式で教師論や教授論を語る。その一つに“Penmanship”がある。なお、『教師必読』の本文では「書法」と訳されているが、目次では「習字」となっている。おそらく目次は学制の教科にあわせて後から記したのであろう。付け加えておくと明治初期において「習字」、「書法」と訳される単語は“Penmanship”の他にも“Handwriting”、“Writing”があるが、厳密な区別はされていないようである。

“TA”の書字教育理論は“T&P”と共通するものも多く、要点を大きく次の四つの項目で示している⁽²⁹⁾。

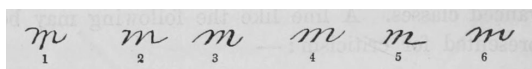
I. The Position. (書く姿勢)

II. Holding the Pen. (筆記具の持ち方)

III. A correct Taste and quick Perception. (正確な鑑賞力と速い認識力)

IV. If possible, classify your Pupils in Writing, as well as in other Exercises. (可能であれば、他の練習と同様に生徒をクラス分割する。)

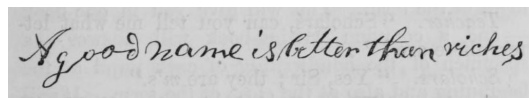
IとIIは、最初期に確実に指導すべき事項であり、正確な鑑賞力とその判断の実践のために必要であると述べている。ここではIIIとIVに注目したい。IIIは、“T&P”の要点①と重なるが、“TA”では実際の授業例で説明している。習字指導の際、生徒は自分が何をすべきか明確にできないまま書いている場合があり、それではただ紙を浪費するだけの悪い習慣が形成されてしまう。そのため、書く以前に鑑賞力と判断力（a correct taste and judgment）を身に付けなければならない。これを実現する方法として授業例を挙げている。ここでは、その板書例とともに訳出して示す。



- 教師 みなさん。これらの文字は何ですか？
生徒 はい。それらは「m」という文字です。
教師 すべて「m」ですか？ これらはみな同じですか？
生徒 いいえ。他のものより良いものもあります。しかし、それらはすべて「m」という文字です。
教師 あなたはどれが一番良いと思いますか？
生徒 「4」です。
教師 「4」が最もよいという人は手を挙げてください。(みな、手を挙げる。) けっこうです。私もそう思います。さて、では他の文字と何が違うのかみてみましょう。ジョージ、「1」について、どう思いますか？
ジョージ 筆画の長さが同じではありません。また、筆画が丸く回転するところがよくできていません。
教師 けっこうです。しかし、それですべてですか？ トーマス、他におかしいところはありますか？
トーマス 私は、これらはすべて同じ傾斜角度で、またよりよい間隔で書くべきだと考えます。
教師 とても良いですね。みなさんがこれらの文字についてよく分かってもらえてうれしいです。今、あなたたちが一つ書くならば、どれを真似するべきですか？
生徒 「4」です。⁽³⁰⁾

このように、かなり具体的に授業の実践例が示されており、生徒はこれらの「m」字について、自らが修正すべき点を確認することができる。この方法は、当時を代表するペスタロッチ主義の問答法であり、生徒が自ら判断するように教師が促す方法である。他の「m」字についても同じように質問し答えさせることができるとするが、例えば3と4を比較すると、かなり微細な傾斜角度・間隔の差であると感じる。「整齊さ」へのこだわりは相当高いレベルで示されていたといえるだろう。さらに、この方法をより高度に示した実践例

として、次の文字列と指導例を挙げている⁽³¹⁾。



図のように具体的な一行を示し、筆跡の欠点を指摘させることで、その欠点を避けて書くように導くのである。この例に対して指摘する欠点としては、回転する筆画が滑らかでないこと、文字・単語の間隔が等しくないこと、筆画の長さが均一でないこと、行の水平に対して文字が上下していることなどを挙げている。これらを指摘することで、正確に書くための準備としての判断力が養われるということである。

これらの指導法は、手習い教育と大きく異なるといえる⁽³²⁾。一つは「m」の字に示されるように、比較によって良否が判断されることである。手習い教育では、悪い例を提示するということはなく、そもそも生徒自身が良否の判断を下すこともなかったと考えられる。手習い教育における批評は教師の仕事であり、その基準は手本あるいは教師の書いた文字にあったのである。

また、批評の際の判断基準にも注目したい。ここでは、筆画の長短、回転の滑らかさ、筆画の傾斜角度、線の間隔などが基準となっている。これらの基準は文字自体に備わる要素ではなく、文字を図形として捉えた要素である。手習い教育では、こうした図形的に分析する批評はみられず、「手本とどのように違うか」が判断基準となった。筆跡と手本とを比較する際にはこうした図形的分析も試みられたであろうが、最終的な基準はいかに手本に忠実かどうかであったと考えられる。

最後に、要点IVに触れておきたい。IVでは、習字はクラスを分割して授業することを提案している。この場合一つのクラスを2つから4つに分け、10~20人単位で構成するとよいという。これは“T&P”の要点③にみえる、生徒に対して教師が個別に批評を加えることを可能にする配慮である。つまり、書字教育においては個別指導が効果的であると考えている。ところが、明治初期の習字教育では「号令によって一挙手一投足に至る動作まで一斉に行う」⁽³³⁾ という一斉教授が教授法として

指導されていた。ノルゼントが述べるどころと全く反対であり、むしろノルゼントと手習い教育が共通している。これは、画一的に斉教授を導入しようとしたことによる誤解であろう。急速な西洋化はこのような誤解も生んだのである。実際にはアメリカの書字教育でも、一人一人懇切丁寧に指導する寺子屋式の教授法が推奨されていたことが確認できるのである。

むすびにかえて

以上、明治初期のアメリカ書字教育理論の受容過程とその内容について、ノルゼントの著作を中心に論じてきた。これまで、学制の習字科は手習い教育の内容の縮小とも捉えられてきたが、それは教科の増加による相対的な縮小である。むしろ西洋教育理論でも書字教育は重視されており、書字能力は教師にとって必須条件とされたのであった。この点でアメリカの書字教育理論には、近世の手習い教育との共通点も多い。習字教育に対し、アメリカ教育理論が影響を与えなかったのではなく、その受容の上で共通点が多かったと考えるべきなのである。

また、ノルゼントの著作における書字教育理論は、学習者の意欲を引き出し、また反復練習に終わらない指導の工夫がなされていた。この点はひたすら長時間書き続けたとされる⁽³⁴⁾手習い教育を反省する材料になったであろう。しかし、ノルゼントの授業実践にみられる分析的批評は、手習い教育とは大きく異なっているといってよい。ノルゼントには、文字を図形として捉え、図形としてきちんと整えていこうとする発想がある。しかし日本では、文字は伝統的な価値を持ち、文字を書く（倣う）ことは伝統を受け継いでいくことであるという側面を持っている。そのため、図形的に整うことが必ずしも正しくはなく、手本と一致することが正しい判断として求められたのである。アメリカの書字教育観は、これに対して一石を投じることになったと考えられるが、日本では受け入れがたい一面もあったのではないだろうか。

これらの書字教育理論が日本の習字教育にどのように反映されていくのかについては、今後の課

題として稿を改めて検討したい。

注

- (1) 望月久貴『明治初期国語教育の研究』溪水社、平成19（2007）年。
- (2) 尾形裕康『学制実施経緯の研究』校倉書房、昭和38（1963）年。
- (3) 尾形裕康『西洋教育移入の方途』野間教育研究所紀要第19集、講談社、昭和36（1961）年。
- (4) 橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』風間書房、平成10（1998）年。
- (5) 「教科書具申」については、倉沢剛『小学校の歴史Ⅰ』（ジャパンライブラリービューロー、昭和38（1963）年）に詳しい。
- (6) 前掲、望月久貴『明治初期国語教育の研究』がこの書名を挙げるが、その詳細は明らかでない。
- (7) Spencer, H.C. (1866) *Spencerian Key to Practical Penmanship*. New York, Ivison, Blakeman, Taylor&Co.
- (8) Spencer, P. R. (1874) *Theory of Spencerian Penmanship for School and Private Learners*. New York and Chicago, Ivison, Blakeman, Taylor&Co.
- (9) 日本におけるスペンセリアン・ペンマンシップの受容については、鈴木貴史「スペンセリアン・ペンマンシップによる筆記体書法—その史的展開と基礎理論—」『東京福祉大学・大学院紀要』第5巻第2号、平成27（2015）年3月。
- (10) 松本仁志「いわゆる「ノメクタ」式教材配列の成立と変遷(1)―「ノメクタ」式教材配列成立にいたる時代的要因―」『書写書道教育研究』第3号、全国大学書写書道教育学会、平成元（1989）年。
- (11) Wickersham, J.P. (1864) *School Economy*. Philadelphia, J.B.LIPPINCOTT&CO.
- (12) 箕作麟祥訳『学校通論』、p.44。以下、引用文は漢字を新字に改め、旧仮名遣いはそのま

まとしている。“School Economy”の原文を挙げる。“The studies of Drawing and Writing must claim a long share of attention in the Primary School.”(p.28)

(13) 箕作麟祥訳『学校通論』、p.45。“School Economy”の原文を挙げる。“Instruction in Drawing and Writing must continue in all the grades.”(p.29)

(14) 前掲、倉沢剛『小学校の歴史 I』。

(15) Page, D.P. (1847) *Theory and Practice of Teaching, or the Motives and Methods of Good School-Keeping*. New York, A.S. Barnes & Co.

(16) 前掲、“Theory and Practice of Teaching”、p.52。

(17) ノルゼントの経歴は、前掲、橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』、佐藤秀夫「教師必読・解説」(稲垣忠彦編『近代日本教科書教授法資料集成』第1巻、教授法書 I、東京書籍、昭和57(1982)年。)を参照した。

(18) Northend, C. (1853) *The Teacher and the Parent; A Treatise upon Common-School Education; Containing Practical Suggestions to Teachers and Parents*. New York, BARNES CO.

(19) Northend, C. (1859) *The Teacher's Assistant, Hints and Methods in school discipline and instruction; being a series of familiar letters to one entering upon the teacher's work*. Massachusetts, CROSBY NICHOLS, & CO.

(20) 石附実「翻訳教育書『然然小学教育論』の一考察」『キリスト教社会問題研究』第37号、同志社大学人文学研究所キリスト教社会問題研究会、平成元(1889)年3月。

(21) 橋本美保「ファン・カステルによる西洋教育書の翻訳作業」前掲、橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』。

(22) “T&P”、p.204。

(23) “TA”、p.179。

(24) “T&P”、p.210。

(25) 笠井助治『近世藩校の総合的研究』(吉川弘文館、昭和35(1960)年)によれば、江戸中

期以降に藩校の学風は著しく実用主義となり、習字は「巧みな文字よりも、正しい文字が要求され、美しく書き得ることよりも、多く書き得ることの方が喜ばれて来た」とある。江戸時代においても文字を「多く」書くためには、「速さ」が必要であったと考えられる。しかし、江戸時代に具体的に「速さ」を目標に教授したという事例は見当たらない。

(26) “T&P”、p.205。

(27) “T&P”、pp.205-208。

(28) “T&P”、p.210。

(29) “TA”、pp.170-180。

(30) 原文を挙げる。

Teacher. Scholars, can you tell me what letters these are?

Scholars. Yes, Sir; they are m's.

Teacher. What, all m's? Are they all alike?

Scholars. No, Sir ; some are made better than others, but they are all m's.

Teacher. Which do you think is made best?

Scholars. The fourth one.

Teacher. Those who think the fourth is the best, may raise their hands. (All hands up.) Very well ; I think so too. Now let us see what fault there is with the others. George, what do you think of No.1?

George. The different parts are not of the same height, and the turns are not good.

Teacher. Very well; but is that all? Thomas, can you name any other faults?

Thomas. I should think they all ought to have the same slope and be better spaced.

Teacher. Very good. I am glad you understand so well about these letters. Now if you were going to make one, which should you try to imitate?

Scholars. The fourth. (“TA”、pp.174-175)

(31) “TA”、p.175。

(32) 近世日本の手習い教育の指導法については、奥山錦洞『日本書道教育史』(藤森書店、昭和57(1982)年)、平山観月『新日本書教育史』

(有朋堂、昭和55(1980)年)、大日本教育会編・発行『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』(明治25(1892)年。復刻、『明治教育古典叢書』第16巻、国書刊行会、昭和56(1981)年)を参照した。

(33) 鈴木貴史「明治学制期における書字教育の分化と教授理論」『東京福祉大学・大学院紀要』第4巻第1号、平成25(2013)年10月。明治初期の習字教育における一斉教授についてはこちらに詳しい。

(34) 前掲、大日本教育会編・発行『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』。

要旨

明治5年の学制には、西洋の教育制度と指導法の影響が強くみられるが、書字教育に関してはこれまであまりその影響が指摘されていなかった。しかし、明治初期の日本ではアメリカを中心とする西洋の書字教育理論が受容されていたのである。本研究は、そのなかでもC. ノルゼントの“Teacher and Parent”と“Teacher's assistant”を中心に、アメリカにおける書字教育の内容と方法と、その日本への受容について考察した。その結果、教育の内容として書字教育を重視する態度など、日本近世の手習い学習との共通性が認められた。一方で、書く速さの重視や、文字に対する分析的批評など、西洋教育理論との出会いによって新たに発見されることになった指導法もあったと考えられる。

(2017年9月11日受稿)